

■ハイドン／交響曲第 94 番 ト長調 Hob.I : 94 「驚愕」

音楽の激動期だった 18 世紀半ば、新たな時代を象徴したのが交響曲である。107 曲を数えるハイドン（1732-1809）の交響曲は、ベートーヴェンの不滅の 9 曲に先だって、このジャンルの発展を方向付けた。つまり、バッハが亡くなって数年後の 1750 年代終わりから 1795 年までの、わずか 37 年か 38 年ほどの間に、ウィーン古典派の礎となる交響曲の基本的な構造を作り上げたことになる。ハイドンの音楽はすっと人の心に入って来る優しさがあって、シンプルな美しさをもっていることから、構えることなく楽しむことができるが、じつはどの曲も当時はいわば最先端の音楽だった。

「驚愕」という愛称をもつ第 94 番は、1791 年、ロンドン滞在中に作曲された。ハイドンは長らく仕えていたニコラウス・ヨーゼフ・エステルハージ侯が 90 年に亡くなったあと、楽団が解散されたので、侯爵家を去る。ちょうどそのころ、彼はウィーンでボン生まれのヴァイオリニスト、ヨハン・ペーター・ザロモンと会い、彼がロンドンで開催しているザロモン・コンサートへぜひ来て、作品を演奏してほしいという要請を受けた。第 1 回ロンドン訪問が 91 年で、このとき完成された交響曲第 94 番が翌年 3 月に初演されている。「驚愕」の名称は初演からまもなく付けられたもので、第 2 楽章の主題が 2 度目に出てきたとき、不意打ちのようにティンパニが強力に打撃音を発することを指し示している。第 4 楽章のコーダにもティンパニのフォルテ打ちが出てきて、びっくりさせられる。

4 楽章構成で、第 1 楽章はアダージョの序奏ののち、ヴィヴァーチェ・アッサイでソナタ形式の主部に入る。第 1 主題は弱音の 3 小節半ではじまり、強音による 14 小節が続く。属調の第 2 主題部に入る前、短調の部分が挟まれるのがハイドン風。第 2 主題はシンコペーションのリズムが特徴的である。第 2 楽章アンダンテは主題と 4 つの変奏、コーダからなる。主題の前半が繰り返された終わりに全合奏がティンパニを伴って「驚愕」の音を鳴らす。第 3 変奏、第 4 変奏では管楽器が主題を奏で、その使い方には工夫が見られる。第 3 楽章アレグロ・モルトはスケルツォ風の早いテンポによるメヌエット。第 4 楽章アレグロ・ディ・モルトは、2 つの主題によるロンド・ソナタ形式。舞曲風の楽想や、軽やかなリズムなど、快活なフィナーレである。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート 2、オーボエ 2、ファゴット 2、ホルン 2、トランペット 2、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記